





(縦 五寸五分)  
横 四寸七分  
表紙 五十三枚  
(奥紙 一枚)  
附録 四枚



月日ハ百代のるに空々しくなり  
ふも又猿人也舟のどよめ雁  
とうへるの口をさして老をむし  
まらおのりて旅を栖とす  
古人も多く旅に死なむるは  
ももいつれの事らりお片まの風  
らうりれて標帖のさしや  
海濱くささくまのぬよとの



破産し、脚の古葉をさしこめて  
やましきらきとよみぬ葉のさき  
白川の岡こしこしとら神の御  
片にてさきくさむに神林のま  
さしあひて葉のまじつとら  
引の破をとりさの結をくして  
ふたすぬるありおほの月を  
さしこめてはらまの人の後りも風

別語考し、ゆかり

あまの戸もは替はれ代もはまのま  
面ハ白を、居の程もあはれは  
まの七口切りのを、翳さし月ハ  
まを切し、先もさし、はらまの  
ね二の星も、さし、ま、上野公の  
ふの指又いつと、ま、さし、ま  
ま、さし、ま、さし、ま、さし、ま



まゝして送るふゆへとふあしし水  
とくひれんか途こふまのりし  
物よふさしりして幻のちまこし  
難ふの細とくし

い春やまの晴し美の月細  
もまらまの神くし行道ま  
アたまし人こい中しあまら  
てぼりげのまゆまこいあまら

ことし元禄ニせしや奥羽も余  
のり締みりりりりりりりり  
共としら髪の色をいあまら  
身しゆまといまこいあまら  
ふせしてゆまこいあまら  
いりけ其日御早加とまら  
まらりりりりりりりりりり  
いりらあえらりりりりりり



よとせとてはつとて子つとてはつとての  
流とてはつとて雨具とて筆のせとて  
あつとてはつとてはつとてはつとては  
とてはつとてはつとてはつとてはつと  
あつとてはつとてはつとてはつとて

室の八嶋より宿より河行雲の白  
神はまのをもはつとてはつとてはつと  
富と一神也無戸室より入て焼のよ

らつとてはつとてはつとてはつとて  
せれつとてはつとてはつとてはつと  
はつとてはつとてはつとてはつと  
このとてはつとてはつとてはつと  
の昔世とてはつとてはつとてはつと

此日日光山の林より流らはつとて  
とてはつとてはつとてはつとてはつと  
はつとてはつとてはつとてはつと



尸符を以て一巻のそのの指も亦ぬて  
体もたつとといふものら仏の濁せを空ま  
示現してうら葉門のた食嘔れ  
くもこの人とききすけりふりやと  
けりてのなまもりていふとてのし  
みもり唯せ智すふあしして正  
出偏圓の者也剛毅木訥の仁と  
をこきとらむと丸菓のはは質を

さるめり

卯月朔日御ふく指ぬすは書  
此山を以て荒ふと書しとてや海  
大師開基の時りえんもゆかふふ  
歳末ももをほりりかやとに  
清光一たてしやとて恩に荒  
くあられに氏あ坂の梅福らち  
行ね多くし書とにしめぬ











仁とていふことしるは村ハ小堀とて  
くまにやれとてすまれぬふの  
やうにあらたれ

うけぬとハ八きね子のおんあし

好て人里とむれハあしむを  
つらとぬあしむをさしむ

黒羽の館代侍坊ちアノ一の  
まはるゝいふまぬあしむのい

日新法つらと共才桃やま

とつ初々初とあしむ自のあし

とていひて親属のまふしあね

とつとつとあしむとつとつと

とつとつとつとつとつとつと

あしむのあしむとあしむとあしむ

古墳をさふらねとあしむとあしむ

と市廂の的を射しあしむとあしむ



ふぶ氏神一正八丈一三三三  
七神社一くはとくすく感念一  
とくらのみくくみくふさるふの枕  
室一一人

御驗光明寺とる者くくく  
くくく者堂とみく

夜ふく足跡とおむ首途  
ふふ雲と序とのくくく御頂和志

とみはりの

飯立横の五人くくくぬまの  
むくくくくくくくくく

く松のくくくくくくくくく  
いつくやくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくく



とくおくあらかしきこまし谷  
あしね板まき世にありて外  
尾のこ今ねらき一十系おもよ  
橋をわたりしと門入  
さしよの尾いつのちまやぼの  
とよらりのちれ石上の小巻岩  
崖よむすいけり妙禪師の石園  
けまは師の名をよとみきし

木崎もなにかうらなまを  
ともあつあつをねしおかし  
そり教さるふり結体より  
るよし送るらん世にけのみと経  
ねせしとをやししきし  
らるふりのまを

障を借ししきしきし  
あしきしきし

教せんは過る水のきしし後しけの



石の毒はよきことありしに  
喋のふくしはらぬのうのこ  
つさるりみちをふしむる  
柳ハサユ柳の甲とありし  
とぬえはふの都さ戸部某の  
は柳みとらふとぬく  
さしのかつとつこの  
しをふらはたぬのしり  
とらりちくれ

田一振撫し去る柳  
ソサるる口をふしむる  
の同しとらしむる  
都一と便ぬしとらし  
は開くと開の  
心をしむる  
みちをふしむる



だくれ也卯の糸のむかしの川の  
糸のつらつらして雪もふるふん  
はるすまら古人冠をふ——衣襟と  
改——木と信州の筆もしこま  
あわ——

卯の糸をかたし——開の晴る  
こく——てひらきししひらき  
川をほふたり——津根もく右

よら名城相馬三春の庄常陸下  
の地をとうひてふつらふけい  
ま不をりよ今ら、こて果て地  
新くくくす川の驛と等家  
とふあをさかしてはちここの  
先右けの園い——つらや  
同も途のくくしみま心つら  
風系と統うりこは憶りし







ふうくまはまうし人まらなるふ  
ししう知人うーはまなる人ー  
さいうくくくくくくくくくくく  
ふのくくくくくくくくくくく  
ままままままままままままま

福崎ようやうあうれハまうくくく  
の石まうくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくく  
けりまのまままままままま  
昔ハままのままままままま  
ままままままままままま  
ままままままままままま  
ままままままままままま  
ままままままままままま

早苗まらまらまらまらまら  
月の光のまらまらまらまら







おしとせし、蓬をふかしてあやし  
さく負ふきし、灯しきりぬかぬ  
つこの火うけりし、痛くあつとよき  
針すゝあふ入り、雷鳴、雨さすり  
降りておぼろよりのもろの雲散り  
こころおぼろしく、眠りておぼろしく  
おぼろしく、消え入りし、えんじの  
さし、やしくかたし、又旅を

行のおの余は、あつとよき  
業おのぼろしく、おぼろしく  
あつとよき、おぼろしく、  
ととと、霧旅、過しの行脚、捨身  
無常の觀念、道路、とらえん、天  
の今、うり、とらえん、方、柳、より、み  
踏、経、横、と、踏、く、伊、を、この、え、ま  
戸、と、と、や、院、摺、白、石、の、ゆ、を、と



芝崎の郡へ入まはる中お実乃  
の塚といつてのちさく人と入ま  
くこもりぬくちさくこゆらとほ  
の里とものこちさくちさくちさく  
の結しつゝのちさく今ちさくちさく  
此の五月ぬくよるいさく  
ちさくちさくちさくちさくちさく  
ちさくちさくちさくちさくちさく  
のちさくちさくちさく

芝崎の五月のちさくちさく  
ちさくちさくちさく

茂濃のちさくちさくちさくちさく  
根ハ土除りり二ちさくちさく  
のちさくちさくちさくちさく  
は降ちさくちさくちさくちさく  
下りし人ちさくちさくちさく



の橋杭よきしれきるるのうらむ  
まはしやねはけしんはるる  
海より作らるるハ代わらぬハ  
従ふとせしやう今将子殿  
のうらむとのうらむ  
松のうらむ

武深の杉女と申すは  
うらむのうらむ

橋より松ハと申すは  
えん川を流しては  
ゆくりや流るるを  
てらるる  
りや神心あり者  
しるるこの者  
石ころを考ふ  
一日案内り宮城野の



あらして秋のうらみさうらみやうら  
む田よと稲つてしう園はらうら  
うらうら也日暮しりぬれにの暮し  
入て空をよまのトとさうさう  
うくさうゆけさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさう  
のさうさうさうさうさうさう  
ねねねねねねねねねねねね  
ねねねねねねねねねねねね

思得のほおつけとら草鞋さ  
ねねねねねねねねねねねね  
うらうらうらうらうらうらうら

あやうさうさうさうさうさう  
うの畫圖さうさうさうさう  
さうのさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさう











まもあしひなむきくら洞子くら  
よて控らううしきたれとと  
まふまじの遺風とれいあ  
しお給しとらうり知はら  
のつ神し信國守五百いとれ  
て宮柱やしく彩椽とらひや  
うし石の階ぬ奴しきり朝日あ  
るのむこととやうしとたの

果茶土の坊くく神靈あり  
しとふまふまの風俗とら  
いと貴くれ神とあしとらと  
うねの戸らう力向し又次とら和歌  
とら奇進とらと五つとらとら  
今月のとらとらとらとらとら  
あし渠ハ勇義忠孝の士也佳命  
今よむのとらとらとらとらとら



渡人の道と勢島と平く  
ふくさくこしよとさうまことり目既  
午よらうし船をりて松崎よたそ  
其間二里餘碓氷の如く

柿の如く水も松崎ハ榎木出  
一の如くして凡湖を西湖を船  
東南より海をへて江の中一と里  
浙江の湖をききみ流くの如く

まうして歌の天と松崎よりの  
まはよふ南浦のうらハこまよこさ  
こ重よゆてまいたよわれ右よつ  
あら肩のあり抱うあり足跡を  
うこしねの如くよやく松葉  
波風よ吹くふあく屈曲その  
まあいこくこ其くこ宵然  
うして美人の顔を粧ふらや旅



神のむし〜大いすまのまらち  
よや造化の天スいしもの人々  
まうらひし 詞とまよさ

雄流の張へたて〜海にあり  
清也すまぬ 輝師のふ堂のた  
ぞ 浪石うらむる 将ねのよは  
せといぬ人し 帰く〜はあ  
と 船行〜しりあつらまの

菴岡の住み〜いもの人  
それ〜さ〜え〜く〜ま  
か〜し〜月海〜う〜つかりて 昼のくま  
又あ〜き〜じ〜江上〜しりて 宿を  
おれ〜窓を〜し〜こ〜二階と作し  
風雲の中〜し 旅ら存〜し  
あや〜ま〜ま〜あ〜ら〜は〜は

松崎や〜は〜は〜は  
い〜し〜は〜は



平ハヨシトシテ 願ハシトシテ  
らヨシトシテ 願ハシトシテ  
此等の行ありる事 亦通 此等の  
事等の事等と 願ハシトシテ  
こゝの事等と 願ハシトシテ  
ありあり

十一日 瑞雲と云ふ 指事と云ふ 二十  
世の昔と云ふ 事等と云ふ ありて

ハ 願ハシトシテ 願ハシトシテ  
事等と云ふ 事等と云ふ ありて  
夢見 弘聖の事ハ 一ツと云ふ 事等と云ふ  
ナニヨリ 事等と云ふ 事等と云ふ ありて  
事等と云ふ 事等と云ふ ありて  
一 雉 志 菊 蕪 の 事等と云ふ ありて



とちわくう路少ききし  
石の巻とい上漆しおこねあ  
とらみてまゝい金花と海と  
見やう―數百の廻入にふつと  
い人灰地をいけういし電の  
知まてまゝいけいけいけい  
およしまゝいけいけいけい  
こらよちうう人う―海と  
小室よ―おまをいけいけい  
いそめたやういけいけい  
尾ゆりの板まの―まゝいけい  
まゝいけいけいけいけい  
まゝいけいけいけいけい  
一室して早泉しゑら其間  
余里いけいけいけい

三代の業耀一腔のち―



大川の流ハ一里ノ多ク上ノ有ク  
流ハ田原ノ處ニ金鯉ノ池ニ  
形ヲ好ミテ先ニ籠ルアリ  
水ノ川南部ニ流シ大河也  
衣川ハ和泉ノ城ニありて  
の下ニシテ大河ニ流入康衡  
ハ流ハ衣ノ淵ニ流シ南部  
ニシテ聖女ノ池ニありて

備シ義臣ノ所ニシテ此城

こりり功名一時の最とらん  
国破  
きて山河あり城春して草  
まみありと笠井ありて  
ついでに河と流しにあり

友軍ありとて夢の如

邦の系より魚房女あり  
白毛

流して身ありて一忠臣



す徑堂ハ三將の像このし  
つん堂ハと代の権と配りこのの  
佛と安置す七宝をまじりて  
障の扉風もやまき金の板、紫  
二重に押し既顔殿に座の最  
と成くさを四面新し圓て  
を覆て風をも後習何手  
の経念といふなり

五月旬の修のしつや  
南戸道なきしつやりて  
里と海らふまはるしの少  
こしてあつこの居あり  
しつあて出羽のまじり  
此路諸人修らるるま  
開きしつやしつや  
閉きしつや



日就いそむれん封人のあはれを  
しけし念をこゝろに同ぬり  
し〜〜中〜

蚤虱もあはれを  
けし〜のこもり出羽の  
火をばしてわ〜  
れはるゝの人をばして  
〜〜人

おれは荒き鬼のま者及銀  
をよ〜の杖と擧げて  
えよ〜り〜  
〜あはれと  
事〜い〜  
り〜のこ〜  
森〜  
ト園〜



雪知らしつらぬるの地にて  
原の中踏ふく水をかきり  
よ離し肌よつらぬる汗を流  
しと衣上の塵よおけり  
葉内とよみのふやうはみら  
ぬ不用のふりまきふりまき  
まひやしてはなをふりまき  
これぬれよちては物もく  
りも也

尾不澤しとて清風とと者をとる  
ぬきこはふらぬるれとて葉や  
しつら都にしておくはくし  
まよは旅の情をよ知れは日  
こちとて途のしつらぬる  
もしつらぬる

雪のふりまきふりまき







家上川のしんと大石田と一帯  
日初を行宮より古き神階の傍  
こぼれこぼれぬあめのむらさき  
しきり舞つあうのつとやいしや  
はたよらりありし新衣ゆき  
道ふあみまらふまといふとみら  
ちるへいし人しきれんとつ  
あましき物しるこのころの風は  
あましき物なり

家上川のしんと大石田と一帯  
日初を行宮より古き神階の傍  
こぼれこぼれぬあめのむらさき  
しきり舞つあうのつとやいしや  
はたよらりありし新衣ゆき  
道ふあみまらふまといふとみら  
ちるへいし人しきれんとつ  
あましき物しるこのころの風は  
あましき物なり

しきりのあまのむらさき







鳥の毛羽と此國の貢と教と  
風土記より行々やん月山湯起  
を合て三とくし當寺武江東  
敵し属しして天台止觀の月明  
らくく因茲融通の法の灯とけ  
らひて僧坊様とくく修験  
行法と勵し一矣山靈地の縁  
知人貴且らつら繁榮長しし  
くく名出とと備けし

八日月山よのりら本郷をあり  
よりりり實符くしとくく修験力  
とくくのよりひしれて雨と霧の  
氣の中よ氷雪と踏くのりら  
中八里らよし日月行居の雲と  
よ入しとちやんちれ身於方とく  
更上し跡水く日後て月とく



毎と陣の隙を杖して却て  
つらと多りおししせははましん  
湯あしーあし

谷の傍に鉦流の陸ととよとせふの  
形治霊水と獲て字あし潔く合  
しうの鉦を打た月山と銘と切  
てせし貴とくふ彼龍泉と鉦  
と陣とわす將莫那のししと

くし道よ城の城あししぬ  
木とそれきりやうしはくくうて  
とりーやうあんととんくうあふ  
橋あつらとまはひくうあふあふ  
味やのりしけし春とこいれぬ  
とこみくのふのむりたるし  
梅ふうううううううううう  
傍のそりのえしとまうとこいとして



れよりしてさくめつとせら中の  
遊ふし者の法むして他言  
下を移す仍し言をさくめつ  
坊しゆれも7の園園の言と後  
とと渡礼の句、終焉とす

涼川やちのさ月の御まゝと  
まのまをまじりあしりあ  
候くまぬほあまよるま候

ゆきとゆきしゆの同くま  
羽黒とまゝして鶴の園のゆきと  
氏重行とまの物のゆきとむし  
うれし誂行一まをたきま  
さりぬ川あままゝしてあゆの漆  
まゝと別居石玉とまの所あゆ  
まをまゝとす

あゆまゆあゆまゆ



暑き日は海にいでたりかた上川

江と入陸の風かえおこるあつて  
今家ほりて方てと貴河田の港  
よりま北の方とと強風を借し  
いこころ少く其際十里り  
やかふくは海風を吹と  
雨朦朧として海の上うく  
園中へ莫くして雨もみ奇せと

きは雨風の晴色よお血ま  
ハるん少く膝をいよて  
とたよ竹天候霽へ  
へうこし出る程く家ほり  
くふえ能園中より  
らま虫の絶と  
岸よあつとあつとあつと  
まらり梅のたまたまの



の行人をくものさし江上より西陵  
の神切后宮の御墓をくも  
と干満珠をくもせふよち幸  
ありしやいふことすいふこと  
すよやそきものさふよちたして  
をくもと撫を風をよ一眠のす  
あつて南をくも海天をくも  
其はくもくも江のあり西のやく

の閑路をくもり素にほを纏て  
秋田よりくもるくも海北より  
えくも流みくもをくもしと  
く江の縦横一里をくも付りねくも  
くもいして又異なりねくもくも  
かく象深くくもくもくも  
りくもくもくもくもくも地盤を  
をくもくもくもくも



象深や雨くぬ絶う縁よのふ  
以神や勢ほくぬそし海流し

みふれ

象深や料理にゆく神一象

しん

このふの高人他事

妻のふや戸板をふかしく入 流

岩上 一 雌鳩の堂ありきり

ちん

流くぬぬあかりさやみさこの葉

海田の余はりくと言して北陸入の  
すよらとて建くのかりい物をと  
うしりくし加賀の府をくして西世に  
とす嵐の園とくゆきとんゆは  
の地とまかり ぬてあやの  
か一ゆりの園も到くはる九日  
若澄のさう神とくあやの  
あみあてとすをさうとく



子月廿六日し夢のありし事

荒海や休後しうらふ天の

今もハ親しううらふまじり

約きしうらむ北國一の難事を

吐してつれなれと捲引し

一掃しうらむ一國はして西のさし

うらむ廿のうらむこ人しうらむ

手たしうらむこのうらむし

おぼしうらむとよけ人想ほのむ

ほと下のお女身一伴環か

うらむしけうらむしけのうらむ

うらむハおつしうらむうらむ

うらむうらむうらむうらむ

うらむうらむうらむうらむ

うらむのこのうらむうらむ

うらむうらむうらむうらむ







れ川をわたりつた那古とて海に  
生糧を就の者には養をうけても  
お杖のしるすとあつさりあつと  
人よあつれとそより五里いろ  
ほひししむよあつたつとあ  
世のせむあつとつらつたつと  
のしねのちつとつたつとつと  
つらつとつたつとつたつと入

とせの香や  
ふ入右もつたつと

ちのあつとつたつとつたつと  
今頃ハ七月中の五日しつたつと  
又頃あつとつたつとつたつと  
さつとつたつとつたつとつたつと  
つたつとつたつとつたつとつたつと  
ふのくつたつとつたつとつたつと  
しつたつとつたつとつたつとつたつと















おりのうらな復鬼のわら  
きよふたふたうらな

今日あやむりはえんきり

大聖おの城お全昌寺とらふ  
ちりりたるら 狩加賀の地  
首ふもあのをむけるもは  
とぶう一むの鳥あつとらふ

流音秋風やうらな

若も秋風をよめしうらな  
おん鳴りのうらな  
あつむむうらな 鐘板うらな  
食堂うらな 入りふハおふのうら  
てし心ふのうらな  
下るうらな  
うらな 階のうらな  
おんうらな 中のうらな



上座掃て歩らやちとふ柳  
よりあへぬさきししてさき<sup>上</sup>替ふ  
こころに於ては細ふの枝を流  
の入りをもあし掃りては  
印のねをあらぬ

みそりやれしはつとこを  
月をきれはらぬ印のねを  
此一首くくお系あふあり

一辨をわらしめは月印のねを  
うらうらうら

丸団天龍寺の者たちと団  
ていしうしうらぬ又金沢のわお  
こらぬのうらぬよんてあて  
やふふふふふふふふふふの  
風系おこるうらうらうらし  
れきふあふぬらうらうらと



すゆ今統ありしらみして

おかきしる川はく余は成

五十一とらよ入て永平さるるれ

了道之後師の由事や邦接

ふ里を避てくくくくく

記をのくくくくく貴きく

ちとく

福井ハハ二里計るれくく 阪

きしめて出くくくくく

路くくくくく等載くく

ちく隠士をといつ事の手く

びくくくくくくくく

十とを竹ありしいくくく

てくくくや将死くくく

くくくれといくくく

くくくくくく市中くく







うく水て比那々らるあつう  
あまむつの伝説をわらしてぬ  
のまきハね〜〜あま〜  
の甲〜と〜してほん〜  
あま〜極〜城〜あま  
〜初彦をゆ〜す家のま  
あれ〜あまの清〜  
〜むらみの夜月ぬ〜

あまのあま〜あま〜  
〜い〜越路のあま〜  
のほ〜あま〜  
〜帰〜あま〜あまの神  
〜あま〜仲哀天皇の御  
廟也社頭神〜あまの  
の同〜月のあま〜  
の白砂霜をま〜あま〜















此一書ハ芭蕉翁奥羽ノ紀行ノ冊也  
素竜ノ筆也書ハ縦五寸五歩横四寸  
七歩紙ノ重ハ十二首尾小白紙ニ加小  
外ハ素紙ノ故也今畧紙ノ成紙ノ長  
紙紫乃糸糸紫ノ金ノ志補らししむ  
る向地ナクノやうなと自筆ノ書  
て瀟身ノ後ノ遷居ノ後ノ人去来ノ  
行ノ事又其ノ蹟ノ書ハ人ノ母ノ故ノ行



この書は福沢文庫にありて相違なく  
今去来の中は心く據るものと教者也

奥細道拾遺 全一冊出来

奥細道菅菰抄 全二冊出来

同附録 全一冊出来追ラ

洛陽蕉門書林 井筒屋彦彦  
橘屋治彦

かじりも艶も多くなりて記したる

まけあらもたか細きものりよおほきを

たさけてもさき休む 刻む一殺ハ

はきまきぬくかた格せまや〜と思ひしを

つとひとたしてまはれ〜り奇事なあやふを

かくて百殺の情を殺人の玉と稱し〜

その旗をひきまきぬの形をひ〜

か〜人死人のい〜より〜て肩にまの



重くしめせ

元禄七年初夏

宗鑑書

此書より古河を遷す翁の紀ありて其書  
清和天皇の長みすむかきし守七の  
又十二初終より白雲あり初成の表帯  
以てやまら外頭令の書新らるる  
しるし乃孫たると去年月院に内子

あくしてりえくよは身一様ふ元禄七年

水無月予う方に偶居ありてうつゝの

めの一のあかきさうのうし深くもまのり

同一年の秋無月松波のありのうの福よ

おせらるるし強ひわとすゝおまのり

何よりとたよ松近くは多しとよおや

おろるる汝日ころは集た求あり今将よ

是下よ譲りなん不思鏡よたのり



あゝいづれ〜とておぼしきおぼしき〜

まら兄の影をうけておぼしき〜

いよ〜<sup>おぼしき</sup>おぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

とておぼしき〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

とておぼしき〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜

あゝいづれ〜とておぼしき〜



清の千の格や清めて袖の露

元禄八乙亥年九月十日

於暖帳落林を書写号

山人  
吉来お

井筒屋のあま侍りー真此御色板新  
のききよ高松、跋り今更えとあは  
とーとらそのえまのゆーーとら  
吉来の冬伊賀の上野を排福の抄は

古き五古の中よは細色の糸巾紙は  
とりあまよまき能能跋去来能侍来乃  
園縁をきこもあまりあまよむらーり  
ーくあーとよ富ーてあまの舞くらよ

明和七寅年十月翁忌日 湖南義仲寺の

願きのし  
疎まらむ



